

歴文クラブ 30年9月研修会  
**壬申の乱Ⅱ**  
—大海人皇子と伊勢・尾張—

1、実施日：平成30年9月11日（火） 雨天実施

2、集 合：近鉄大和西大寺駅南口 8：00

3、行程スケジュール

出発（8:00）⇒鈴鹿関宿（10：00）⇒北桑名神社・桑名の渡し

（11：00）⇒名古屋市博物館（11:50～12:50 昼食と見学）⇒

熱田神宮（12:55）⇒断夫山古墳（13:50）⇒氷上姉子神社（14:25）

（帰途）⇒西大寺駅（18:00 予定）

4、資料

①壬申の乱Ⅱ ～大海人皇と伊勢・尾張

②参考資料 壬申の乱～倭国から日本国へ

③壬申の乱と万葉集

奈良・人と自然の会  
**歴史文化クラブ**

担当世話人：藤田秀憲、塩本達也、古川祐司

（事務局：中井弘 Tel 090-2381-1122）

## 「壬申の乱Ⅱ」～大海人皇子と伊勢・尾張～

### 1. コース

西大寺駅南口 (8:00)⇒ 鈴鹿関宿⇒ 北桑名神社⇒ 名古屋市博物館 (昼食と見学)  
⇒ 熱田神宮⇒ 断夫山古墳⇒ 氷上姉子神社⇒ 西大寺駅南口 (18:00 帰着予定)

### 2. 7世紀中ごろの東アジア情勢と倭国



#### <隋の滅亡と唐の興隆>

- 589年 隋、中国統一
- 618年 隋滅び、唐興る (～907)  
～唐の隆盛、周辺国の激動～
- 642年 高句麗、百濟同盟する (～660年)
- 645年 乙巳の変 蘇我宗家滅亡、  
大化の改新始まる
- 660年 百濟 (唐・新羅同盟軍に敗北) 滅びる
- 663年 「白村江の戦い」敗北 (百濟滅亡)
- 668年 近江遷都 (天智即位)
- 668年 唐、高句麗を滅ぼす
- 670～676年 唐、新羅戦争
- 672年 壬申の乱
- 676年 新羅 (唐の柵封) 朝鮮半島統一始まる  
(～935 高麗)
- 698年 渤海の建国 (大祚榮)

### 3. 白村江の敗戦処理

#### (1) 唐・新羅連合軍に対する防衛対策

- ① 大野城、水城
- ② 朝鮮式山城
- ③ 烽火台
- ④ 防人

#### (2) 近江遷都の理由

- ① 近江は四周の山々と広大な琵琶湖が天然の要害となっていて、防御性が高く、有事の際には、容易に東国や北陸に抜けることができる地域的優位性。
- ② 大津は北臨差・東山道・東海道諸国との交通の要に位置し、有事における物資も兵も容易に調できる地の利を有している。
- ③ 近江の大津は高句麗との密接な連携を保持できる地に存在している。
- ④ 近江は農業生産も鉄生産も豊かな国で、緊急事態に対処するためには政権の大きな基盤となりうる条件を備えている。
- ⑤ 大津の地は、5世紀末以来、渡来系集団が集住していて、彼らの梯防・経済力・労働力を駆使することにより、緊急時での都造りの条件が整っていた。
- ⑥ 中央集権国家確立への施策は、古いしがらみからの脱却が不可欠で、近江遷都はそのしがらみを断ち切る手段としての政策ととらえる。(滋賀県立安土城考古博物館 大道和人氏)

(3) 百濟人の受入れ（近江国神前郡）と朝廷内での活用

(4) 律令体制の整備

- ① 庚午年籍(全国規模の戸籍)の作成(670年)
- ② 近江令の制定(668年)

(5) 唐からの使者派遣と交渉（計3回来日）

664年(天智3年) 5月 郭務悰 来日、12月帰国

(百濟鎮將劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函與獻物)

665年9月 唐、劉徳高、郭務悰を派遣、12月劉徳高、帰国(この時は近江で大友皇子と対面)

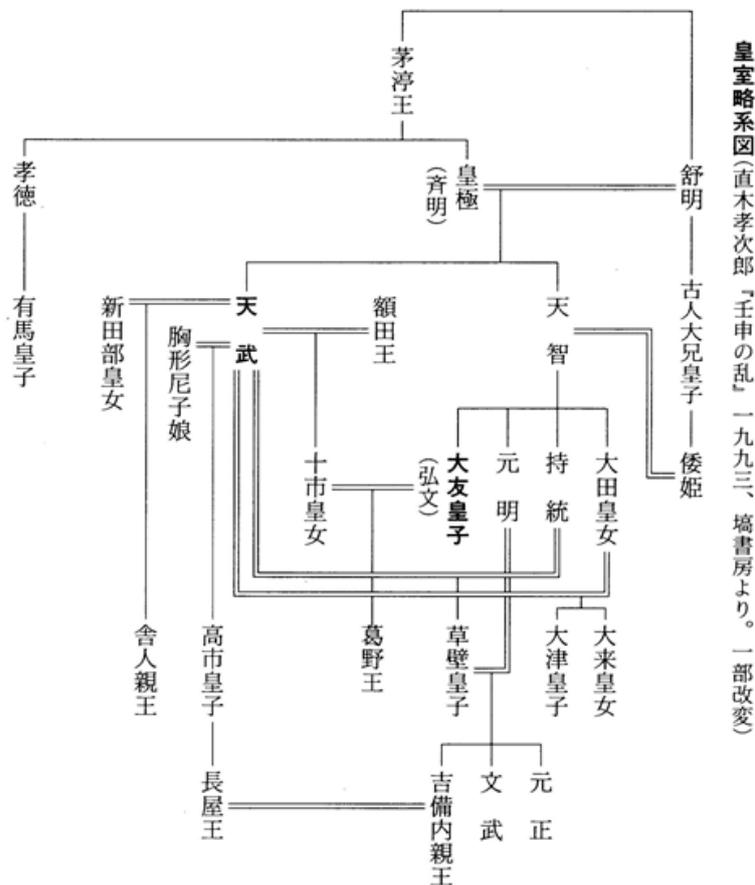
671年(天智10年)11月 対馬国司の使者から大宰府へ 「郭務悰ら2,000人来る」旨の通報

672年(天武元年) 3月 筑紫の郭務悰に天皇の喪を告ぐ。5月30日 那大津より本国へ帰る

(五月辛卯朔壬寅、以甲冑弓矢賜郭務悰等。是日賜郭務悰等物、總合繩一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。戊午、高麗遣前部富加抔等進調。庚申、郭務悰等罷歸。)

※ 7世紀後半の国際的緊張の中で、戦争や敗戦後の防衛対策や遷都にともなう大規模な人民徴発や地方豪族への負担と大和豪族たちの不満、そして対唐外交方針についても国内に不満と不安が広がる中で、「壬申の乱」への要因を大津宮が抱えることとなった。

4. 「壬申の乱」に関する皇室系統図



## 5. 「壬申の乱」と美濃・尾張・伊勢について

### (1) 尾張氏とは

尾張とは愛知県西半分の旧国名であり、この地に古代から勢力を張っていたのが尾張氏である。

古代史に華やかに登場するのは尾張連草香で、その娘目子媛はヲホド王（後の継体天皇）の越前における最初の妃となり、産んだ2男児は短い期間であるが、安閑天皇と宣化天皇として即位した。

継体天皇は日本海と琵琶湖および周辺の諸河川の水運を掌握、河内の馬飼をも勢力下におき、その結果「近畿水回廊」を政治権力の基盤としたが、尾張氏もまた木曾・長良・揖斐の三川および伊勢湾の水運を握ることで力を保持しており、息長氏らとともに継体政権を支える有力な氏族であった。当時の伊勢湾の海岸線は今よりも北にあり、現在の愛知県海部郡は木曾川の河口部からその上流の東側である。

大海人皇子の乳母は、尾張郡海部郷の首長大海の娘で、大海人は幼少の頃ここで育てられたという。彼は壬申の乱で吉野を脱出し伊勢へと抜け出た際、尾張氏一族の助けを受けた。尾張大隅は傘下の鍛冶伊福部を派遣して、大海人皇子の本拠美濃での刀槍の生産に協力した。

海人は大きく二つに分かれ、船を操り航海する職能を司るものと潜り・釣り・網などで漁労を行う海人がいた。海部と云う名を持つ郡は尾張の他には紀伊、阿波、豊後、隠岐（海士）がある。

海部氏系図は丹後半島の付け根、天橋立の近くの籠神社の社家海部氏に伝わる系図である。

籠神社の祭神は「彦火明命（ひこほあかりのみこと）、またの名を「天火明命（あめのほあかりのみこと）」、「天照国照彦火明命」である。

尾張氏の祖神も海部氏と同じく「天火明命」であり、航海・漁労人である。海人が日本海側から太平洋側に移り住み、やがて人口が増加し、尾張氏となって伊勢湾一帯の水運と漁業の支配を確立した。その後、内陸に進出し広大な水田地帯をも支配するようになり、次第に漁業・農業ともに生産性を高め、経済力・政治力・軍事力を拡張し、文字通り尾張国の支配者となった。

尾張氏は后妃を入れてヤマト朝廷と外戚関係を結び、朝廷の要職に人材を送り込むと共に、本拠地はヤマト朝廷の東日本平定のための前線基地となった。

### <古代の伊勢湾>

伊勢・三河流域、特に濃尾平野は「尾張太古之図」（養老元年〔717年〕）によると、古代の海岸線は現在の桑名、大垣、岐阜、犬山、小牧、名古屋市緑区を結んだ位置にあり、名古屋市をはじめ現在の濃尾平野の大部分が海に覆われていた。

### <愛知の地名>

「あいち」の地名は、万葉集巻三の高市黒人の歌「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟（あゆちがた）潮干にけらし鶴鳴き渡る」に詠まれた「年魚市潟（あゆちがた）」に由来するといわれ、「あゆち」が「あいち」に転じ、愛智（郡）の郡名もここから生まれました。

廃藩置県後、県庁が愛知郡の名古屋城内に置かれたところから県名に採用されました。



## (1) 尾張氏の古墳

東海地方最大の前方後円墳は、尾張国三の宮 熱田神宮のすぐ北西にある断夫山古墳である。墳長150mだが、継体天皇の陵とされる今城塚古墳（大阪府高槻市）でも190mなので、六世紀前半では屈指の規模といえる。被葬者は、継体天皇の即位前からの妃でわる日子媛（めのこひめ）の父、尾張連草香（くさか）が有力視されている。

継体擁立基盤の越や近江に比べても大きい墓は、功績が多とされた証か、安閑・宣化両天皇の外祖父ゆえか。時期が近い味美（あじよし）二子山古墳（墳長94m 愛知県春日井市）は墳形が似通い、日子媛の墓とも言われている。

尾張氏には日子媛に先立つ后妃伝承も残り、孝昭天皇の皇后で孝安天皇を生んだ世襲足媛（よそたらしひめ）や、崇神天皇日の尾張大海媛（おおあましひめ）、応神天皇の皇后で仁徳天皇の母仲姫（なかつひめ）が尾張氏の血縁とされる。

最も有名なのは、日本武尊（やまとたけるのみこと）と宮簀媛（みやずひめ）の伝承である。東国を平定した日本武尊は、帰路に尾張で宮簀媛と結ばれた。伯母の倭姫から授かった草薙剣を置いて伊吹山へ向かうが、氷雨に遭い、衰弱して伊勢国の能褒野（のぼの）で亡くなる。剣は熱田社に祀られ、平安期まで尾張氏が官司を務めた。《日本武尊物語 P-9 に後述》

## (2) ヤマトの東国進出と「日本武尊」伝承

宮簀媛を祭る氷上姉子神社が名古屋市の東南端、知多半島の付け根にある。四世紀後半の兜山古墳（東海市）も近く、周辺を尾張氏の本拠とみる説もある。

尾張で4世紀代の古墳が集中するのは、岐阜県境に近い犬山扇状地（東之宮古墳など）と名古屋北東の庄内川中流域（高御堂古墳など）である。

尾張氏はそれらの首長を抑えて濃尾平野に支配を広げたものと思われる。

## (3) 尾張の国力の源（海運・水運・陸運の要衝）

尾張の国力の源のひとつは海上交通である。断夫山古墳のある熱田台地は往時、年魚市潟（あゆちがた 愛知の由来か）などの入海に突き出ている。

海部郡が置かれた4国「紀伊、阿波、豊後、隠岐（海士）」のひとつでもあり、海産物の貢進とともに水運の要所として重視された。加えて尾張は東海道・東山道など陸路の要衝でもある。

日本武尊の伝承は、尾張を東国進出の拠点とみなす意識が反映されている。

尾張の古い古墳には、東之宮や高御堂など「前方後方墳」が目立つ。墓制の違いや発掘土器などから、邪馬台国大和説の立場から、尾張など東海地方を狗奴国に比定する説もある。

（白石太一郎氏「考古学からみた邪馬台国と狗奴国」、赤塚次郎氏「狗奴国伊勢湾岸説」等）

<尾張氏の力の根源は>

① 海運・水運（伊勢湾、木曾川、長良川、揖斐川等）

② 東海道・東山道の交通の要衝

③ 赤坂金生山の赤鉄鉱

地表から30～40センチメートル掘ると、幅40M、高さ7～8M、  
長さ100～200Mにおよぶ大鉱脈（露天掘り、純度60数%）

④ 伊勢湾の海産物と濃尾平野の農産物

#### (4) 大海人皇子の乳母は大海氏

天武天皇の殯（もがり）に大海宿禰葛蒲（あらかま）が壬生のことを誅（しのびごと）している。

#### (5) 美濃 安八磨郡（安八郡）の湯沐邑（大海人皇子の領地）

湯沐令多臣品治（ゆのうながし おおのほむじ）（古事記編纂の正五位上勲五等太朝臣安萬侶の父）

#### (6) 赤坂の金生山（純度64%の鉄鉱石、露天掘り） 製鉄、鍛冶の拠点

白村江の戦いで失われた鉄（武器・農機具）の生産拠点、武器庫？

第二次大戦中も、赤坂の鉄鉱山を八幡へ送り精錬、平成7年6月に鉄鉱石枯渇、現在は石灰石採掘のみ

#### (7) 南宮大社（美濃一の宮）

御祭神は金山彦命（かなやまひこのみこと）

全国の鉱山、金属業の総本宮として、今も深い崇敬を集めている。

金山祭（ふいご祭り）11月8日＜野鍛冶による鍛錬式を再現 全国から金属関係者が参拝＞  
＜由 緒＞

御祭神金山彦命は、神話に古く、伊勢神宮の天照大神（あまてらすおおかみ）の兄神に当らせられる大神様であります。社伝によれば、神武天皇東征の砌、金鵄を輔（たす）けて大いに靈験を顕わされた故を以って、当郡府中に祀られたらせられ、後に人皇十代崇神天皇の御代に、美濃仲山麓の現在地に奉還され、古くは仲山金山彦神社として申し上げたが、国府から南方に位する 故に南宮大社と云われる様になったと伝えます。

南宮大社の宝物の特徴は、刀剣類が多いことである。その数は数十振にのぼる。また、数が多いだけでなく、文化財として価値が高い逸品が奉納されている。これは南宮大社が金属の神様であること、その昔、西美濃が刀鍛冶の中心だったこと、などによると考えられる。

南宮大社の刀剣類の中で、もっとも古いものは「圭頭太刀」。柄（握るところ）の形が、上はとがり、下が方形になった玉のことである圭に似ているのでこう呼ばれる。六世紀から七世紀の大和時代のものとされる。古墳からの出土品と見られるが、発掘場所と記録が定かでないため文化財には登録されていない。 県指定、町指定の文化財に登録されている名刀もたくさんあるが、「兼元」は、長さは七十三・一センチ。

初代兼元は室町時代の人。二世兼元は不破郡赤坂（現在の大垣市赤坂町）に住み、刀匠として名をあげ、後に孫六と称した。後年、子孫は関に移った。「兼元」は通称「関孫六」と呼ば

れている。

## (8) 伊夫伎神社

不破郡垂井町（不破関の東）に鎮座する。『延喜式』神名式、美濃国不破郡三座の一。美濃国二宮。『文徳天皇実録』仁寿二年（852）十二月二日条に「美濃国伊富岐神を以て官社に列す」とあるのが国史初見で、このとき以来官社として毎年の祈年祭班幣に預かる神社となった。伊吹山一帯を治めていた伊福氏は尾張氏と同族で天火明命を祖神としており、伊吹大神＝天火明命とする説が古来あったことから、天火明命の御子神九柱を本殿の左右に祀っている。

## (9) 氷上姉子神社

御祭神

日本神話に登場する尾張国造の『乎止与命（オトヨノミコト）』の娘、宮簀媛（みやずひめ）命

熱田神宮の縁起である『尾張国熱田太神宮縁記』（鎌倉時代初期頃の成立の伝承によれば、日本武尊は東征の途中で尾張国愛智郡氷上邑にある建稲種公の館に寄り、建稲種公の妹の宮簀媛を知って契りを結んだ。

建稲種公は日本武尊の東征に従い、日本武尊とは別の道を行って帰途で亡くなったため、それを知った日本武尊は宮酢媛のもとへ急いで向かい、そこにしばらく留まった。その後、日本武尊は神剣を宮酢媛のもとに置いて大和へと出発したが、伊吹山で病にかかり、ついに伊勢国能褒野で亡くなった。

宮酢媛はその後神剣を守っていたが、年老いたため祠に祀ることとし、占地して社地を定め熱田社と名付けたという熱田神宮の創祀)。また宮酢媛が亡くなった時には祠が建てられたが、これが尾張国愛智郡氷上邑にある氷上姉子天神であるという。氷上姉子神社の社伝ではより具体的に、仲哀天皇4年に宮酢媛の館跡（現在の元宮の地）に宮簀媛命の神霊を祀ったのが氷上姉子神社の創祀になるとし、その後持統天皇4年（690年）に東方の現社地に遷座したとする。

## (10) 熱田神宮

主祭神 熱田大神（あつたのおおかみ）

三種の神器の1つ草薙神剣天叢雲剣とも）を神体とする。⇒天照大神を指す

相殿神 天照大神、素戔尊、日本武尊、宮簀媛命、建稲種命

第12代景行天皇の時代、日本武尊が東国平定の帰路に尾張へ滞在した際に、尾張国造乎止与命（おとよのみこと）の娘・宮簀媛命と結婚し、草薙剣を妃の手元へ留め置いた。日本武尊が伊勢国能褒野（のぼの）で亡くなると、宮簀媛命は熱田に社地を定め、剣を奉斎鎮守したのが始まりと言われる。そのため、三種の神器のうち草薙剣は熱田に置かれて、伊勢神宮に次いで権威ある神社として栄えることとなった。

天智7年、新羅の僧道行は神宮から草薙剣を盗みますが、逃げる途中捕まり、剣は宮中に置かれることになった。しかし日本書紀によると、朱鳥元年6月、天武天皇が病に伏し、占いによるとその原因が草薙剣の祟りであることがわかり、宮中においてある剣を熱田神宮に送り返したと記され

ている。

大宮司職は代々尾張国造の子孫である尾張氏が務めていたが、平安時代後期に尾張員職の外孫で藤原南家の藤原季範にその職が譲られた。以降は子孫の藤原南家藤原氏・千秋家が大宮司、尾張氏は権宮司を務める。

## (11) 断夫山古墳

断夫山古墳は、熱田台地南西端の標高約10mに立地する。全長約150mで、東海地方最大の前方後円墳であり、後円部径約80m、高さ13m、前方部幅は約120m、高さ16mを測る。発達した前方部に特徴がある。墳丘は3段築成で、墳丘西側には方形の造出部がある。

本古墳は、古来「日本武尊」伝承による宮簀媛命の墓として伝えられ、熱田社の神域として保護されてきた。戦後の戦災復興事業の中で、愛知県の管理する「神宮西公園」の中に取り込まれ、都市公園として保存されてきた。正式な土地換地が行われた段階で国史跡指定となった。墳丘は前方部南東端に封土の崩落があるほかはほぼ完存している。周溝は埋め立てられ改変されているが、明治年間の地積図には、明瞭に周溝の痕跡が認められる。造出部で須恵器の出土が報告されていたり、須恵質円筒埴輪が表採されており、これら出土品の年代は6世紀前半の特徴をもつ。本古墳の築造年代もその時期とみられ、この頃活躍する尾張連氏に關係する墳墓とみられている。

## (12) 久留倍官衙遺跡（国指定史跡）・・・ 四日市市

壬申の乱の砌、天武天皇伊勢神宮遥拝の地とされ後に、持統天皇・聖武天皇が立ち寄られたという。

四日市市内の北部、丘陵の東先端部に位置する古代の官衙遺跡。多数の掘立柱建物を検出した。検出した遺構は大きくⅠ期からⅢ期に分けられ、Ⅰ期は正殿、脇殿等を整然と配置する政庁、Ⅱ期は長大な東西棟建物群、Ⅲ期は倉庫群からなる正倉院と、時期により異なった性格を示す。また、これらの遺構群は全て東を正面とする点が特徴となる。その他、丘陵の北東斜面部にも同様にⅠ～Ⅲ期の変遷をたどる掘立柱建物群があり、館や厨としての機能が想定できる。

久留倍官衙遺跡は官衙の政庁や正倉院等が時期ごとに場所を違えて展開するもので、古代伊勢国朝明郡衙跡である可能性が高い。壬申の乱の際に大海人皇子（後の天武天皇）が朝明郡に立ち寄ったことが知られており、それとの関係も注目される。



### (13) 齋王の歴史

#### ① 齋宮

齋宮は「いつきのみや」とも呼ばれ、齋王の宮殿と齋宮寮（さいくうりょう）という役所のあったところです。齋王は、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替りごとに皇族女性の中から選ばれて、都から伊勢に派遣されました。

古くは、伊勢神宮起源伝承で知られる倭姫命（やまとひめのみこと）など伝承的な齋王もいますが、その実態はよくわかっていません。制度上最初の齋王は、天武天皇（670年頃）の娘・大来皇女（おおくのひめみこ）で、制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330年頃）まで約660年間続き、その間記録には60人余りの齋王の名が残されています。

#### ②大来皇女（おおくのひめみこ）

天武天皇の皇女・大来皇女は、実在が確認できる最初の齋王である。その就任は壬申の乱の翌年（673年）で、その翌年（674年）に伊勢神宮に向かった。その彼女のもとに、天武の有力な皇位継承者であった同母弟の大津皇子が訪れる。しかし、飛鳥に戻った大津は、天武崩御による政情不安定のなか、朱鳥元年（686年）、謀反の罪により死を賜る。父帝の崩御により齋王を退任した大来皇女は、父も最愛の弟もない飛鳥に戻った。『万葉集』には、弟を想う哀切の歌が6首残る。

以上

## 「壬申の乱」～倭国から日本国へ～

### (1) 白村江の戦い

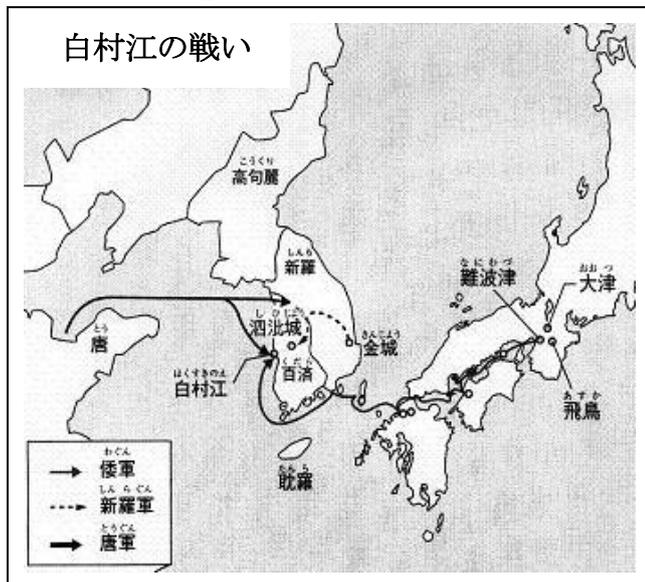
660年7月18日、新羅(金春秋-武烈王)5万と唐(高宗)水陸13万の連合軍に攻め込まれ、百済(義慈王)は滅亡した。

3カ月後、百済の遺臣鬼室福信は百済再興のため、大和朝廷に援軍の派遣と人質の百済の皇子(余豊璋)の送還を要請してきた。

「百済を助けることは、新羅と戦うだけでなく強大な唐を敵に回すことになる。このまま百済を見捨てた場合、多年日本が勢力を伸ばそうとしていた朝鮮半島を全く失うことになるばかりか、百済が滅べば危険は次に日本に及ぶかもしれない。」朝議は沸騰したと思われるが、ついに百済救援に決し、駿河の国で軍船を造らせた。

12月24日、斉明天皇は難波宮に行き、みずから筑紫に出向いて救援軍を派遣することを表明した。

661年(斉明7年)1月6日、68歳の斉明天皇を乗せた軍船(170艘・安曇比羅夫大將軍)は難波の海から征西の途にのぼった。中大兄、大海人両皇子および妃達もこれに同行した。



1月8日、吉備大泊海(おおくのうみ-岡山県邑久郡)。

1月14日、道後温泉に近い伊予国熟田津の石湯行宮(いはゆのかりみや)に泊まり、長期滞在。

この時の額田王の歌に <熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(万 1-8)>がある。

3月25日、那大津(福岡県博多)に到着。磐瀬行宮(いわせのかりみや)(福岡市南区三宅)に入る。

5月9日、朝倉宮(福岡県朝倉郡朝倉町-博多湾から約40Km内陸部)に入る。

7月24日、斉明天皇(68歳)急死。中大兄皇子は皇太

子として喪に服しながら、称制して、長津宮で戦の指揮をとり、9月、豊璋に倭国最高位の「職冠」を授け、5千人の兵をつけ、福信のもとへ送った。

662年、百済に帰国した豊璋は百済王となり、福信と協力して戦いを有利に進めた。しかしだんだん二人の間が不和になって、豊璋は謀反の罪で福信を殺害した。

663年3月、中大兄皇子は百済に2万7千人の兵を3軍編成で送り、<前将軍 上毛野君稚子(かみつけのきみわかこ)、中将軍 巨勢神前臣訳語(こせのかんざきのおみおさ)、後将軍 阿部引田臣比羅夫(あべのひきたのおみひらふ)> 援軍は博多湾から壱岐、対馬を超え朝鮮半島へ向かった。

663年8月、唐・新羅軍が百済復興軍の周留(する)城を包囲し、唐軍は軍船170艘を白村江(錦江~クムガン河口)に配備した。

倭国軍が朝鮮半島西岸に到着。百済王豊璋と倭国軍は、「我ら先を争わば、彼自ずからにに退くべし」と突撃作戦に出た。

8月28日、白村江で唐軍と百済・倭国軍が激突。倭国軍は唐の水軍によって挟み撃ちにされ、軍船400艘が燃え上がり大敗した。百済王豊璋は高句麗へ逃亡し、9月7日、百済が陥落し永久に滅亡した。

唐・新羅連合軍に大敗した倭国軍は、亡命を希望する百済人を伴って帰国。唐・新羅軍の侵攻に備え、対馬、壱岐、筑紫の国に防人と烽火台を置き、大宰府に水城(みずき)を築き、瀬戸内海を主とする西日本各地に古代山城などの防衛砦を築いた。さらに667年に天智天皇は大津宮(大津市錦織町)に遷都、翌年即位し、律令の編纂と中央集権体制の整備を目指した。

天智天皇が崩御すると、672年に古代最大の内戦「壬申の乱」が勃発し、これに勝利した大海人皇子は、飛鳥浄御原宮で即位し(天武天皇)、専制的な統治体制を構築してゆき、新たな国家建設を進めた。

<朝鮮半島周辺のその後>

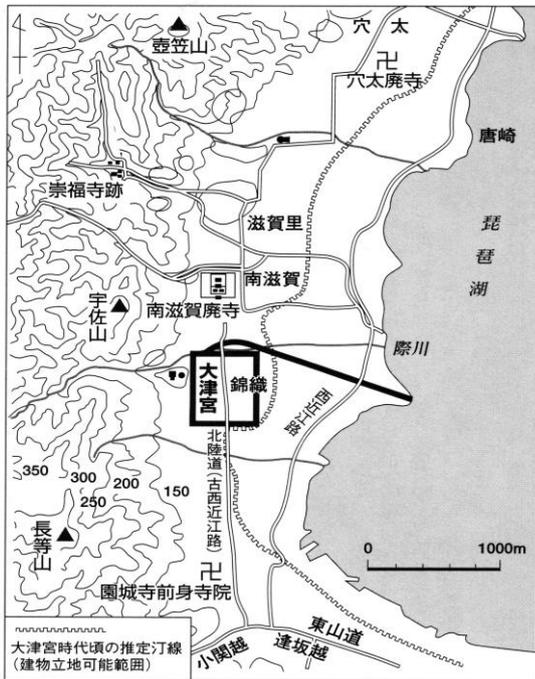
唐・新羅は668年に高句麗を滅ぼした後、一時対立するが、唐の冊封を受けた新羅によって、676年朝鮮半島が統一された。また698年、朝鮮半島東北部に高句麗の遺民、大祚榮によって渤海が建国された。

## (2) 敗戦処理と近江遷都

663年8月、白村江の戦いで大敗した中大兄皇子は、兵の撤収と百済遺民の受入れ、唐・新羅連合軍の侵攻に備えて防衛体制整備に迫られていた。

これらを支えていたのが弟の大海人皇子であり、二人の間の調整役が内臣の中臣鎌足であった。

665年(天智4年)、間人(はしひと)皇女が亡くなった。敗戦処理の目途を立てる中で、ようやく中大兄皇子は、667年(天智7年)、飛鳥(後岡本宮)から近江の大津宮(大津市錦織)に遷都し、翌年即位(天智天皇)し、皇后に異母兄古人大兄皇子の娘である倭姫王を立てた。



図説「古事記と日本書紀」坂本勝 青春出版社より抜粋

天智天皇は「天皇を中心とする中央集権政治」の完成を目指したが、669年(天智8年)10月、その実現のため尽力してきた中臣鎌足が56才で病死した。

生前、天智自ら鎌足を見舞い、大海人皇子を使者として、最高の官位である大織冠と大臣の位をさづけ、藤原の氏を授けた。

全国的規模の戸籍庚午年籍(670年)がつくれ、法令の編纂をするなど中央集権体制が進展した。百済貴族たちが母国の滅亡により、多数亡命していたことも、天智天皇の政策実現に好都合だった。

即位の頃から、皇位継承問題に絡んで、天智と大海人の間にすきまが生じ、不穏なわだかまりが生じてきた。

天智天皇には皇子が4人あり、一人(建皇子)は夭折している。残る3人の内、最年長が大友皇子(母は伊賀の

国造家、伊賀臣の出)である。

一方、大海人皇子の母は、天智天皇と同じ(皇極・齊明天皇)で血筋からいうと比較にならない。また当時は、天皇に有力な弟がいる場合、(混乱を避けるため)子供より先に弟に皇位を相続させるのが慣例であった。

しかしながら、大友皇子は「懐風藻」によれば、『魁岸奇偉、風範弘深、眼中精耀、顧盼焯焯。唐使劉德高、見而異曰、此皇子、風骨不似世間人。』云々と、ひとかどの才能のある人物であつたらしい。

皇位の父子直系相続にこだわった天智天皇は、671年(天智10年)正月2日、大友皇子を太政大臣に任命し、同時に蘇我臣赤兄(あかえ)を左大臣、中臣連金(こがね)を右大臣、蘇我臣果安(はたやす)と巨勢臣人(ひと)と紀臣大人(うし)の3人を御史太夫に任じ、大友皇子を中心とする政府首脳を成立させて、大海人皇子の地位を政治の場から浮き上がらせ、暗に引退を求めた。

大海人はこの屈辱に耐え、再挙の日が来ることを胸に秘め、今まで通り忠実な天智の弟の役割を務めていた。

ところが、局面は天智天皇の病で急変した。

8月に病床につき、9月になっても治らず、再起の難しい病であることを自覚した天智は、10月17日、ついに意を決して大海人皇子を病床に招いた。使者に立った蘇我臣安麿は、大海人に使命を伝えた後に「ことばに用心なさい」とつけくわえた。

<病床に伺候した大海人皇子と天智天皇のやりとり>  
天智は、「朕、疾甚し。後事を以て汝に屬く」云々  
大海人は、「再拜みたてまつりたまひて 受けずして日したまはく、『請ふ 洪業を奉げて、天后に付屬 けまつらん。大友王をして、諸政を奉宣はしめむ。臣は請願ふ、天皇の奉爲に、出家して修道せむ。』」

<日本書紀巻第27>

大海人は天智の病床からすぐに内裏の仏殿にいき、髪をおろし、即日、自家の武器をことごとく官に収めて、天皇に二心のないことを明らかにし、19日わずかの従者を連れて吉野に向かった。その日のうちに飛鳥の嶋の宮に入り、翌日、吉野の宮滝に到着した。

### (3) 壬申の乱(倭国から日本国へ)

乙巳の変の昔、古人大兄皇子は僧侶となって吉野に隠遁したが、天智(中大兄皇子)の疑いをとくことが出来ず、謀反の罪で殺された。吉野の大海人皇子は、ひたすら恭順の意を表し、天智の疑いをとくことに努めた。

一方、天智天皇の病状はその後も悪化を続けたため、近江朝廷は吉野の大海人に行動を起こす余裕はなかった。病床の天智は、大友皇子が自分の死後の難局を乗り切ってくれることを願うほかなかった。

671年(天智10年)11月23日、天智天皇の願いを受けて、大友皇子と蘇我赤兄以下5人の重臣が、内裏の西殿の織の仏像の前で「6人が心と同じくして『天皇の詔』を奉じ、大友皇子を守ろう」という誓いを立てた。29日には天皇の病床の前で誓いは繰り返された。

12月3日、天智天皇(46才)は大津宮で崩御した。

大友皇子は近江朝廷で政務をとるが、吉野の大海人皇子に対する同情と期待は、宮廷から消えるどころか日ごとに高まった。大友連馬来田、吹負(ふけい)の兄弟は、大海人皇子に将来を託して、近江朝を去って大和へ戻った。

このような状況の中では、大友としても吉野の大海人に対する警戒心を緩めることが出来ない。大津京から大和飛鳥に至る道の要所要所に物見をおいて、警備にあたらせた。

武器を持たない大海人は、近江朝のわずかな行動にも神経を尖らせており、近江朝の警戒態勢を、吉野攻撃の準備かと疑った。

672年(壬申)5月、「天智天皇の山陵を山科に造るため、美濃・尾張の国司に命じて、多数の人夫を徴発し、これに武器を与えている。」という情報が朴井雄君によって、吉野に伝えられ、大海人皇子は「坐して死を待つか、立って戦うか」の決断を迫られた。

近江朝廷には大海人への同情者が少なくないし、十市皇女(大友皇子妃)の情報や、近江側の動静を勘察しつつ、計画は綿密に立てられ、6月22日大海人皇子は挙兵した。

大海人は村国連男依ら美濃出身の舎人3名を、直轄地の美濃国湯沐邑(ゆのむら)へ挙兵の使者として送り、湯沐令、美濃の国司と連絡をとり兵を集め、美濃と近江を結ぶ不破道をふさぐことを命じた。

24日、大海人は残りの舎人20余人、女官十余人を引き連れ吉野を立った。きさきの鵜野讃良皇女や草壁皇子、忍壁皇子も軍中にあった。夕刻、大和と伊賀の境に到着した一行は、夜を徹して伊賀国を南から北へ通過して、伊賀北部の積殖(つむえ)の山口に到着した。

此処で、手兵を連れて大津宮から甲賀の山を越えて駆けつけてきた長子の高市皇子が合流した。

伊勢国に入ると、鈴鹿のあたりで出迎えに駆けつけた国守三宅連岩床や湯沐令にゆきあった。

25日には大津京から駆けつけた大津皇子一向に出会い、昼前には伊勢北部の朝明郡に到着した。そこへ村国連男依がかかけつけ「予定通り美濃の兵の動員が進行し、不破道を占領した。」と報告した。

大海人は使いを東海・東山両道に送って、兵を集めるという挙兵計画の第二段階を実行に移し、高市皇子を不破に遣わし前線指揮官とし、自分は後方にあつて全軍の統括にあたった。

これに対して近江朝は後手にまわり、大海人皇子の東国入りを24日の夕刻に知り、大きな衝撃を受け「直ちに追撃すべし」の意見具申もあったが、大友はこれを採らず、諸国に募兵の使いを出し態勢を整えてから攻撃する方法をとった。しかし募兵は難航し、以後、形勢は大海人の有利に進んでいくことになる。

近江側の誤算は、大和一国を大海人側に奪われたことである。大友吹負(ふけい)は大海人の東国入りを知って、兵を集め大和の漢氏一族と連絡をとって、6月29日飛鳥古京を急襲した。

7月2日、戦備の整った大海人軍は、第一軍は紀臣阿閉麻呂らが将となり、伊勢、伊賀を通過して大和の大友吹負と連絡し、南から大津京を目指した。

第二軍は村国男依が将となって、不破から近江に入り、東から大津京に向かった。この時、近江側の兵と区別するため(漢の高祖にならぬ)衣の上に赤い布を付け、旗ざしものにも赤色を用いた。

近江軍の内紛で大将の山部王が御史大夫の蘇我果安に殺され(蘇我果安は自刃)、軍の士気は乱れた。近江路の戦いは、大海人方が一方的に優勢で、7月7日 息長横河の戦い、9日 犬上川のほとり鳥籠山の戦







◎テーマ額田王 ぬかたのおおきみ

天智・天武の二人の天皇に愛された宮廷歌人 絶世の美人？

額田王は万葉前期の代表的な歌人で素晴らしい歌を万葉集に四首残しています。当初大海人皇子と結婚し十市姫皇子を生みますが、大津京に移ってから天智天皇の後宮にはいりません。天智崩御の後、壬申の乱が起こりますが、その後は明日香浄御原宮へ移り余生を送り没年は八〇歳と当時としては非常に長命でした。鏡王女とは姉妹であったとの説もあります。

齐明天皇7年（661年）1月に新羅征討軍を難波から出発させた、熟田津（愛媛県道後付近）で潮待ち  
している時の歌

熟田津に にきたつ 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎい出な 卷一―八  
熟田津に 船乗りせんと月をまっていたが、やつと潮もよくなってきた。さあ出発だ いさ漕ぎ出そう

白村江の敗戦（663年）の後、中大兄皇子は都を明日香から大津へ移した。（667年）その為、群臣は行列を組んで遠い近江国へ移っていった。その時額田王の詠んだ歌

三輪山を みくら しかも隠すか 雲だにも 情あらなも 隠さふべしや 卷一―十八  
三輪山をまあそのように隠すものか、せめて雲だけでも情けがあつてほしい 隠すなんてことがあつてよいだろうか

天智天皇7年（668年）近江の蒲生野で額田王から大海皇子へ捧げた歌

あかねさす 紫野行き 標野行き しめの 野守は見ずや 君が袖振る 卷一―二十  
紫草の生えている野を行ったり来たりして あなた様は袖を振っていらっしやいますが、そんなことをなさつては野の番人が見るではありませんか

大海人皇子の額田王への返歌

紫草の むすひのみ にはへる妹 いも を 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも 卷一―二十一

紫草のように美しいあなたを、もし憎いと思うならば、あなたはもう人妻だもの、なんで私は恋焦がれましようか。人妻のあなたを恋焦がれないではられない私です

## ◎テーマ 許されぬ恋

### その1 高市皇子と十市皇女

大海人皇子と額田王の娘十市皇女は大津京で天智天皇の息子の<sup>おわきぎ</sup>大友皇子（弘文天皇）と結婚します。

大友皇子は次期天皇と見なされていたので、十市皇女も大妃、つまり次期皇后と見られていました。高市皇子は異母妹の十市皇女を想っていたのですが、実らぬ恋どころでした。

672年、大友皇子と大海人皇子との政権争いから壬申の乱が起こり、高市皇子は父の命を受け、大將軍として近江朝廷側と戦いこれを打ち破ります。乱の終わつた後、近江方にいた額田王や十市皇女らは大海人皇子に引き取られ明日香京に移ります。夫と父の戦いに傷心の十市皇女は明日香に移つた7年後に亡くなります。高市皇子は父天武の信頼も厚く太政大臣の高位に上ります。高市皇子は十市皇女への恋心を隠して

明日香浄御原宮で政務に追われていましたが、父の命で異母妹の但馬皇女と結婚します。

次の歌は万葉集に残る高市皇子の十市皇女への挽歌3首の内の1首です

山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに行かめど 道の知らなく 卷二―一五八

山清水に山吹の花が美しく咲いている 皇女の命を蘇らせる清水を汲みにいきたいが 私はその道を知らない

### その2 但馬皇女と穂積皇子

万葉の時代には異母兄弟間の結婚は認められていました。タブーとされたのは同母の兄弟姉妹間の結婚のみでした。

天智天皇も天武天皇もお妃は十人以上いらっしゃいましたので、異母兄弟はたくさんいました。當時は子供は母方で育てられましたので兄弟でも異母兄弟はめつたに顔を合わすことはありませんでした。但馬皇女は父天武の命で異母兄弟の長男で壬申の乱の功労者の<sup>たけちのみこ</sup>高市皇子に嫁ぎました。高市皇子は太政大臣という高位にありました。しかし、彼女には穂積皇子という異母兄弟の想い人がいました。二人の仲は次第に人々の噂になつて、天皇の知るところとなります。天武天皇は激怒して穂積を近江へ追放し、二人の仲は引き裂かれます。

その後、但馬皇女は早くに亡くなつてしまいます、二首目の歌は、穂積が許されて明日香に戻つたと但馬皇女を偲んで詠んだ歌です。

人言を 繁み言痛み 己が世に 未だ渡らぬ 朝川渡る

但馬皇女 卷一―百十六

あまりにも世間の噂がうるさいので、生まれて初めて夜明けの川を渡る事よ  
(歌からは激しく一途な皇女の恋心が伝わってきます)

降る雪は あはにな降りそ 吉隠よなぼりの 猪養いかいの岡の 寒からまくに

穂積皇子 卷二―二百三

雪よそのように激しく降ってくれるな 吉隠の猪養の岡に眠るあの人寒いだらうから

## 壬申の乱Ⅱ 参加者名簿（敬称略）

2018年9月11日

番号	お名前	参加料	出欠確認	備考
1	青木 幸子	5 0 0 0 円		事務局
2	池田 富子	5 0 0 0 円		
3	池田 信明	5 0 0 0 円		
4	井戸 八穂子	5 0 0 0 円		
5	上西 千代子	5 0 0 0 円		
6	内河 洋文	5 0 0 0 円		
7	小田 進八郎	5 0 0 0 円		
8	川勝 孝雄	5 0 0 0 円		
9	川岸 次郎	5 0 0 0 円		
10	川岸 美子	5 0 0 0 円		
11	塩本 勝也	5 0 0 0 円		担当世話人
12	杉本 登	5 0 0 0 円		
13	鈴木 末一	5 0 0 0 円		
14	千載 輝重	5 0 0 0 円		
15	田代 一行	5 0 0 0 円		
16	田中 克彦	5 0 0 0 円		
17	富井 忠雄	5 0 0 0 円		
18	永井 幸次	5 0 0 0 円		
19	中井 弘	5 0 0 0 円		事務局
20	中野 達矢	5 0 0 0 円		
21	福田 美伸	5 0 0 0 円		
22	藤田 秀憲	5 0 0 0 円		担当世話人
23	古川 祐司	5 0 0 0 円		担当世話人
24	松尾 弘	5 0 0 0 円		
25	森 英雄	5 0 0 0 円		
26	山本 妙子	5 0 0 0 円		
27	弓場 厚次	5 0 0 0 円		
28	吉村 さつき	5 0 0 0 円		
合計		1 4 0, 0 0 0 円		